



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライステラス

第69号 2015.8.16  
(年2回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集/ふるきやらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チーム石塚内

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

## 特集・農山村は続く

特集・「地元を創り直す時代」藤山浩／和歌山県那智勝浦町／新潟県十日町市／鹿児島県（湧水町ほか）／徳島県上勝町ほか／「地域文化と棚田③」鳥取県若桜町



2014年、徳島県上勝町で行われた「棚田フェスティバル」。集落課題解決型の活動を実現。撮影:澤田俊明

# 特集・農山村は続く

いま、広く「限界集落」「地方の消滅」など、過疎と高齢化が先行する農山村地域の危機が語られるようになった。けれども、現実には中山間（棚田）地域では、地元の文化や環境を生かし人々が行き交い、さまざまな挑戦が続いている。今回は、こうした農山村の頑張りや模索、また課題や提案を現場からお伝えしていく。

## 地元を創り直す時代、「積み重ね」の尊さを棚田に学ぶ

島根県中山間地域研究センター 研究統括監・島根県立大学連携大学院 教授 藤山 浩

藤山 浩

図1 島根県津和野町左鎧地区の棚田

### 棚田の美しさは、少しづつの「積み重ね」から

私が暮らす島根県西部の石見にも、沢山の素晴らしい棚田があります。「日本の棚田百選」だけでも、吉賀町大井谷・益田市

中垣内・浜田市都川・浜田市室谷・邑南町  
神谷と5箇所も入っています。

棚田の美しさは、「積み重ね」の美しさ

です。まず、無数の石が丹念に積み重ねら  
れて、一枚一枚の田んぼを支えています。

そして、そうした田んぼが幾重にも、積み  
重ねられている様に、私たちは圧倒されま  
す。しかも、1年や2年の事業  
で整備されたものではありませんませ  
ん。時には、数百年に及び、  
人々が少しづつ、積み重ねてい  
った「作品」なのです。それ  
は、また、数百年にわたり、毎  
年毎年、稲を植え、育て、草を  
取り、収穫を続けていった営み  
の「証し」でもあります。

### 「2周目」が見えない 「規模の経済」路線

このような「少しづつ、長年  
かけて」の「棚田方式」の対極  
に位置するのが、ここ半世紀の  
「規模の経済」のやり方です。  
棚田のような小規模・分散的な  
生産方式は、「条件不利」なやり

方として、排撃されました。そして、人々  
が暮らす地域社会さえも、農山漁村から都  
市に流れ込んだ大量の若年層の居住を賄う

ため、「規模の経済」に則り、大きな郊外団  
地が集中的に形成されました。

華やかな大量消費時代の舞台ともなった  
地域一斉高齢化が起きています。例えば、  
島平団地では、高齢化率は2011年時点  
において、34・3%に達しています。「団塊  
の世代」が全員高齢者となる2015年以  
降は、その高齢化率は、棚田の広がる中山

間地域を追い  
越すことでの  
よう。

しかも、高  
島平団地の高  
層住宅群のエレベーターには、病気になつ  
ても担架は載りませんし、亡くなつても棺  
桶も載りません。これから都市の団地やマ  
ンションでは、お互いが疎遠な人間関係の  
希薄さも心配ですが、建物からしても人々  
の老いや死を受けとめることができない地  
域の構造となっているのです。このまま、  
高齢化が進めば、地域全体が「使い捨て」  
される恐れさえ出できます。



図2 東京の高島平団地の高層住宅群 (板橋区)

20世紀半ばからの大量的資源・エネルギー  
ー投入を基盤とした「規模の経済」は、確  
かに目覚ましい経済成長をもたらしまし  
た。しかし、それは、最初の「1周目」は  
好調に見えて、「2周目」の持続可能性が  
見えない社会システムなのです。一見、短  
期集中型の大量造成および大量入居によつ  
て低コストで実現したように見える団地で  
すが、1世代が巡り一斉高齢化の「2周  
目」に入ると、大規模集中型のツケが噴出  
し、持続性の見えない地域社会となつてい  
ます。そして、大量の資源・エネルギー消費



費は、例えば地球温暖化という排気ガスの捨て場がないという文明全体としての「2周目危機」に直面しているのです。

したがって、問題は、今年の6月に「日本創成会議」が提唱したような、これから東京を中心に大量に発生する高齢者を地方へと送り返せばよいという対症療法で解決できるものではないのです。

## 田園回帰の始まりと今後 の「1%戦略」

地域としても地球としても長続きするかたちが見えない時代において、私は、持続可能な循環型社会に向けて地元と暮らしが創り直す先駆けとして、中山間地域への田園回帰を呼びかけたいと思います。

極めて注目すべきことに、島根県の中山間地域では、2010年代に入り、山間部

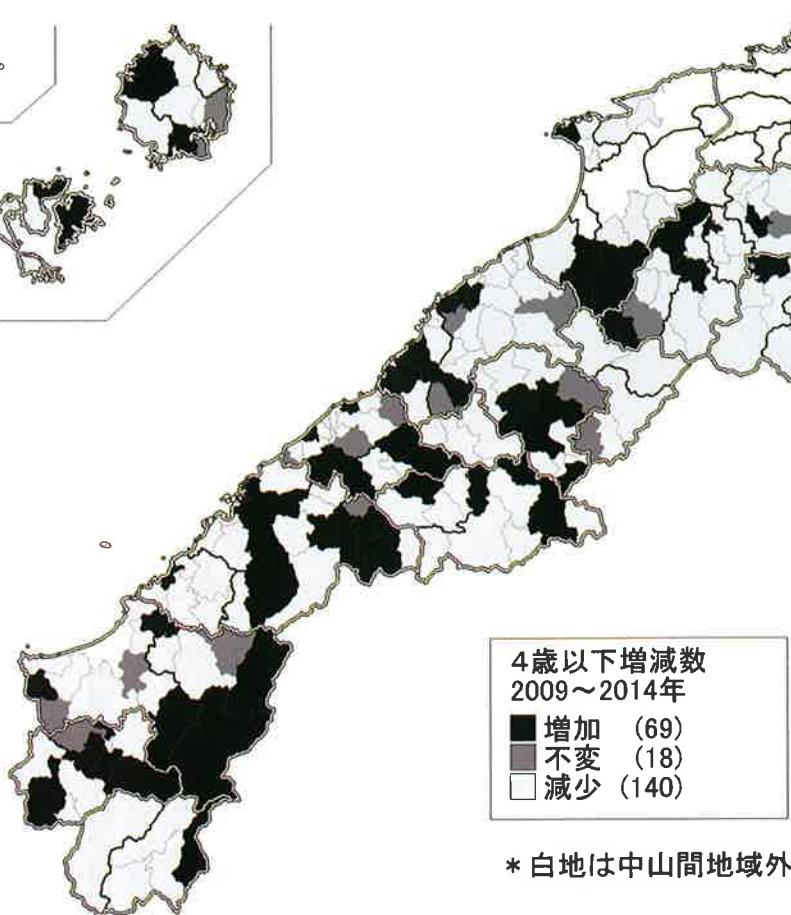


図3 島根県中山間地域における4歳以下人口の増減数

私が開発した人口予測プログラムによれば、多くの地域において人口の1%に当たる定住者を3世代のバランスをとつて現行よりも増やすことができれば、地域人口・高齢化率・子供数は安定的に推移することができます。「市町村消滅論」に絶望することなく、地道に毎年人口1%の取戻しに対

して、島根県の中山間地域では、2010年代に入り、山間部の4歳以下の人口が増えていました。これは、地元の人・自然・伝統のつながりが息づいています。都市的な消費生活の豊かさをひたすら求める「東京双六」の「上がり」の危うさが、東日本大震災を契機に意識され始めた今、「東京卒業」を目指む移住者の目は、「中途半端な田舎」ではなく、「田舎の田舎」に注がれているのです。

「小規模」「分散」性が優越する中山間地域は、「規模の経済」の中で、条件不利地域とされてきました。しかし、「循環の経済」が求める再生可能なエネルギーや資源の大半は、わが国の中山間地域に存在します。食糧や水といった私たちの生存に不可欠な資源も同様です。新しい「循環」のゲームのルールに立てば、中山間地域が、「循環型社会」の先駆者になり得る可能性は十分あります。

本創成会議」が提唱したような、これから東京を中心に大量に発生する高齢者を地方へと送り返せばよいという対症療法で解決できるものではないのです。

や離島といった「田舎の田舎」で若い世代の定住が目立ち始めています。2009~2014年の住民基本台帳データによれば、中山間地域における公民館区・小学校区という227の基礎的なコミュニティ単位において、3割を超える69地区(30.4%)で4歳以下の子供が増えています(図3)。30代女性について見れば、全体の4割を超える96地区で増えているのです。

中山間地域の多く、特に「田舎の田舎」では、地元の人・自然・伝統のつながりが息づいています。都市的な消費生活の豊かさをひたすら求める「東京双六」の「上がり」の危うさが、東日本大震災を契機に意識され始めた今、「東京卒業」を目指む移住者の目は、「中途半端な田舎」ではなく、「田舎の田舎」に注がれているのです。

草刈りをはじめ、田舎暮らしには確かに面倒くさいことも多いです。しかし、手間暇かけたものしか、記憶には遺っています。世代を超えて美しく記憶に刻み込むよう、積み重ねの暮らしができることには、田舎の「特権」(privilege)です。棚田を守り育ててきた地域のみなさん、是非、「ここ」で一緒に暮らそう!と呼びかけてください。本格的な田園回帰の時代がそこまで来ています。

## 記憶が積み重ねられる 地元を創り直す

応する所得の1%取戻しを、地域内循環の強化により進めてほしいと考えています。

したがって、問題は、今年の6月に「日本創成会議」が提唱したような、これから東京を中心に大量に発生する高齢者を地方へと送り返せばよいという対症療法で解決できるものではないのです。

したがって、問題は、今年の6月に「日



〔参考文献〕本稿の議論が具体的に展開、説明されています。

藤山 浩著「田園回帰1%戦略～地元に人と仕事を取り戻す～」、農文協（シリーズ田園回帰第1巻）、2015年6月刊

# 農山村は続く——移住者が住民の45%を占める色川地域

和歌山県那智勝浦町 色川地域振興推進委員会 会長 原 和男

1:「棚田を守ろう会のイベント」

農山村に踏ん張って地域を守り続けてきた人たちの多くは昭和一桁生まれより上の世代だ。一番の若手でも今年80歳ということになる。ほとんどの人が現役引退が多くの都市に出てしまっている。引き継いで守り続ける人たちがいない限り地

域は消える。  
「限界集落」「消滅集落」などという言葉が飛び交うのも無理はない。ただ、逆に言えば「農山村で暮らしたい」という人たちさえいれば農山村は決して消えない。今、農山村の暮らしに価値を見い出しほり住みたいという人たちが確実に増えている。

私が暮らす和歌山県那智勝浦町色川地域も以前からそういった人たちを受け入れ続けていて今や移住者数は、住民数368人の内の45%以上168人にまで増えている。

私たちの地域では、移住者受け入れに際して「お見合い期間」というものを設けている。数日間滞在してもらつて15軒ほどを回つて話を聞いたり農作業を体验したりしながら、人を通じて、移住希望

者も以前からそういった人たちを受け入れ続けていて今や移住者数は、住民数368人の内の45%以上168人にまで増えている。そこで地域の多様性は増す。それが地域の魅力にも繋がる。しかし、地域らしさが失われてしまつては元も子もない。地域は「これまで」があつて「いま」があり、「いま」があつて「これから」がある。そんな流れの中の「いま」としてそれが次に繋ぐのかが問われている。それが地域を守るということを背負うということだ。移住者はやもすると「これら」にばかり目が行きがちだ。

『色川を語り継ぐ会』の活動、『地区の思い出冊子づくり、地域通信誌『色川だより』の年一回の発行、月刊情報紙『ほとと色川』の発行等を通じて先人の営みや思いも含め様々な情報発信に取り組む

者は地域らしさを、地域側はどんな人かを知ることに努める。双方気に入れば空き家の紹介などをしていく。

移住を決めた人にその理由を尋ねると多くは人とのやり取りの中で何か懸かれるものを感じて決断をしている。『人が人を呼ぶ』という捉え方をしている。いい事も悪い事も正直に伝える。是が非でも来て欲しい訳ではない、合う人が来てくればいい。そんなスタンスでいる。移住希望者の受け入れは、地域を守つていくための仲間探しだと考えている。来る人の思いは様々で、移住者が増えることで地域の多様性は増す。それが地域の魅力にも繋がる。しかし、地域らしさが失われてしまつては元も子もない。

ここで地域の流れを意識してもらうようになっている。そして何よりもそれぞれが日常の暮らしの中で起こる様々な関わりを大切にしながら過ごすことが肝心だ。「地域を知ろうとし地域に溶け込もうとする」姿勢が移住者には必須だ。地域らしさはそんな日常の中で保たれていく。地域を守るために担い手としての移住者を得るには、まずは、地域に暮らす者たちがどんな地域にしていきたいのかを自らに突き付け、誇りを再燃させ地域ビジョンを明確に発信し始めるこそがスタートラインだ。その輝きが、人を呼び農山村を次に繋ぐ原動力となつて「地域再生」の歯車を回し始める。



「老若男女の楽しみの場を創出—色川大文化祭—」

## Information

平成27年10月15・16日には、和歌山県那智勝浦町で「第2回わかやまの棚田・段々畑サミット」が開催される

# 農山村は続く——限界集落へ家族で。NPO化で有給スタッフに

NPO「十日町市地域おこし実行委員会」理事・事務局長 多田朋孔

ともよし

2004年10月23日、中越地震が発生した。新潟県十日町市池谷集落も震災の被害を受けた。当時8世帯いた集落からは2世帯が離れ、残った住民は「もうこの集落をたたむしかない……」とまで

追い詰められた。ところが、震災をきっかけにJENというNGOが緊急支援に入った。ボランティアを派遣するJENの要請で地元側の団体として2005年3月、十日町市地域おこし実行委員会が発足した。都会の人たちとの交流や米の直販など、震災復興から地域おこしの活動へと取り組みを前進させていた池谷集落に私は2009年5月、田植えの体験で初めて訪れた。

地域の方々の雰囲気や一面に広がる自然の景色に魅了されたことと、代表の山本さんの「この集落での取り組みは小さな取り組みではあるが、もしこれが上手くいけば全国に1万以上ある限界集落に希望をもたらすことができる。そういう意味で全国の問題に立ち向かうつもりでやっている」という言葉にピンときたことで、私はライフワークとして本気で取り組んでみたいくつもつた。

折しも、2009年に総務省が「地域おこし協力隊(以下・協力隊)」を開始し、池谷集落も受入地区として手を挙げていた。「住んでいるからこそ本当の意味での地域おこしができる」と考えた私はすぐに応募を決断し、2010年2月には家族で池谷集落に移り住み、協力隊として活動を開始した。協力隊の任期中に十日町市地域おこし実行委員会をNPO法人化し、任期終了後は理事・事務局長とし

て会の運営に携わっている。私が来た当初は関わる人たちは皆ボランティアで仕事を合間に活動していたが、現在は有給スタッフ複数名の体制で活動をしている。

私は「地域おこし」とは自分たちの住む地域を将来に希望が持てる地域にすることだと考えている。そのためには将来のある若者たちが真剣に考え、時間を使つて活動に参加する必要があるのだが、地域おこしの現場で活躍しているのは退職後の方が多く、若者は少ない。決して若者がいないのではないし、意識が低いわけでもない。ほとんどの若者は生活に必要な収入を得るために多くの時間を割かねばならず、目先のお金にはならないがよりよい将来を作るための取り組みに対して時間を使うことが難しい。

今の社会が制度疲労をおこしていることに気づいている人は少なくないはず。これまでの社会を変え、将来に希望が持てる社会を作るために、当事者である若い人たちが多くの時間を使える仕組みを作ることが必要がある。これは公共性の高いことなので、税金を有効に活用すべき分野だと思う。協力隊のような制度や地域おこしに関する団体が事業の委託を受け、それが仕事になるということは、若い人が「地域おこし」に関わることができる仕組みになり得る。だが、協力隊には任期があり、委託事業では行政の安い下請



2012年1月 雪堀り体験イベント「スノーバーストーズ」



2012年9月 稲刈りイベントで、はさかけの作業



2012年5月 お米の直販の精米作業

# 農山村は続く――

## 地域おこし協力隊へ、決断

長野県小谷村 地域おこし協力隊員 藤枝享恵

40代までに仕事の区切りをつけ、自然の美しい所に移住し喫茶店をする。学生の頃からの目標を実行に移していった折、ニュースでこの制度を知り、ニユースでこの制度に応募。退路を断ち小谷村に協力隊として着任しました。

研修では村の大まかな説明と過疎や高齢化などによる「限界集落」の原状の説明を受け中谷集落に配属となりました。

日々草刈りや様々な地区の行事に参加している中でどうやって村おこしをすればいいのだろう、実はどんでもない所に来てしまったのかとも考えるうちに村外からたくさんの方がいらっしゃる地区の催しがありました。それを見たとき自分は考え過ぎだと気が付いたのです。お客様はその原風景を楽しみ、村民は文化でなす。背伸びなんていらない身の丈でいい。何故なら私たちの日常は



1



2

非日常なんだから。そう思うと肩の力は抜け、本当に集落にとって何が必要なのか冷静に見られるようになきました。

一緒に耕し、一緒に笑う。土地を知り技を覚え文化を継承する。人が集まれば元気になり元気になれ挑戦できる。これ

も村おこしの一つのカタチではないでしょうか。

わたしは派手なことはできません。すぐには実績を出すこともできないでしよう。しかし、時間をかけて作り上げたものはいいものができる。それだけはフレることなく信じてここに生きたいと思います。

過ぎだと気が付いたのでありました。それを見たとき自分は考え過ぎだと気が付いたのです。お客様はその原風景を楽しむ、村民は文化でなす。背伸びなんていらない身の丈でいい。何故なら私たちの日常は

40代までに仕事の区切りをつけ、自然の美しい所に移住し喫茶店をする。学生の頃からの目標を実行に移していった折、ニュースでこの制度を知り、ニユースでこの制度に応募。退路を断ち小谷村に協力隊として着任しました。

研修では村の大まかな説明と過疎や高齢化などによる「限界集落」の原状の説明を受け中谷集落に配属となりました。日々草刈りや様々な地区の行事に参加している中でどうやって村おこしをすればいいのだろう、実はどんでもない所に来てしまったのかとも考えるうちに村外からたくさんの方がいらっしゃる地区の催しがありました。それを見たとき自分は考え過ぎだと気が付いたのです。お客様はその原風景を楽しむ、村民は文化でなす。背伸びなんていらない身の丈でいい。何故なら私たちの日常は

## 海と棚田を見ながら風に吹かれる時間が愛おしい

新潟県佐渡市 地域おこし協力隊（岩首地区） 新田聰子

一枚の大きな写真には、海岸線ギリギリに作られた田んぼとその先に広がる海。

駅のコンコースで、一際輝いて見えた

その写真の場所に向かったのは2010年夏。

真夜中のフェリーに乗つて、朝焼けが広がる日本海の風に吹かれて佐渡へ向かつた。

自然の色がとても鮮やかに目に写り、とても眩しい。どこへ行つても気持ちよい風が吹き、香る匂いに癒される。久しぶりに深呼吸をしたような気がした。

2013年2月、協力隊に着任し佐渡の南東部、岩首集落での暮らしが始まつた。世界農業遺産の象徴的な景観として注目された棚田があり、廃校を活用して都市住民との交流を住民の有志が行つている地域である。棚田散策や学生対応などの窓口を行いながら、朝晩と休みの日は農作業や集落の様々な事をこなす日々。田舎の生活はとても忙しい。

岩首で様々な場面に出会い、人と触り合いで生き物の温度を感じて、五感を常に刺激されながらの生活に新しい自分と出会い、感性が育まれていると感じじ。ここにいると安心するようになつた。海と棚田を見ながら風に吹かれる時間が愛おしい。日々、表情を変え自然の鮮やかさは今も、私をわくわくさせている。

これからは、ずっと思い描いてきた福祉の分野に進む。地域の人たちが、最後まで地域で自分らしく暮らすためのお手伝いがしたい。



1

2



1：担当している岩首地区的棚田写真

2：岩首の棚田及び海を一望できる展望台「そらまめ」からの写真

3：現在佐渡で活動している「地域おこし協力隊」全員の集合写真（前列右端、紺の帽子を着用の女性が新田さん）

# 農山村は続く——鹿児島県の棚田から

「ここは、藪払いがたいへんですから」

藪払いとは、草刈りのことである。鹿児島県

内の取材で何度もこうした言葉に出会つただろう。

鹿児島は緑の密度も色も濃い。猛然とした草木

の勢いが身边に迫り来る。

今回、鹿児島県内の棚田地域3か所におじや

ました。北薩エリアのさつま町寺元地区。鹿児

島工リアの鹿児島市八重地区。そして姶良・伊佐

エリアの湧水町幸田地区である。

## さつま町 永野寺元——3haのうち

### 荒廃が半分近く進みながらも

「今年は、私がケガをしてしまい、寺元での活動は休ませてもらっています」

さつま町永野、寺元棚田保存会の代表、黒田敏隆さん(74)が、柔軟な笑顔で出迎えてくれた。棚田オーナー制度を平成18年から9年間続けてきたが、10年目での思わぬケガだった。

寺元地区は、さつま町(\*1)内の東方部、旧薩摩町永野にある。古くは金山で栄えたところだ。

「永野金山は1640年に発見された薩摩藩直営の金山です。産出量が多く、すぐに徳川幕府が採掘を禁止したんです。採掘量が多くて、薩摩が力を持つのを徳川は恐れてね。1643年から13年間、鉱夫たちは再開を待った。その間に、食べていくために寺元に下りて棚田を拓いたんです。土坡を築き、その上に川から

が力を持つのを恐れていた。さつま町寺元の上段の棚田。馬小屋と家が続く昔ながらの民家にて。子牛が愛らしい

\* 1:さつま町の人口は約2万2000人

拾つた石を積んで造つてあります」

永野金山は1952(昭和27)年に閉山し、

その320年以上の歴史に幕を下ろした。だが、江戸時代に造成された棚田は、平成の世

へと引き継がれてきた。

寺元集落は現在28戸。多いときは約100戸ほどあつた。寺元棚田保存会は集落全戸が入っている。水管理など常時作業をするのは10人ほどだが、棚田オーナー制度のイベント時には、集落みんなで参加してきた。

寺元の棚田は全体で約3ha。ここ1~2年で半分近くが耕作されなくなつたという。川沿いに山道を登つていけば、下段、中段、上段と3か所に分かれた棚田に出会える。どの田んぼも有害鳥獣用のネットや電柵で囲われていた。

下段の棚田で、耕作をやめた田んぼの中で草を刈る人を見かけた。久保田親美さん(83歳)。「牛の飼用ですよ。家で牛を1頭飼つていて、餌の草を刈るだけです。やめて3年です。田んぼ作業のとき、怪我して。去年うちのも逝つて…」作れんようになつて、田んぼ1町3反やつてました。

田んぼの上に建つ大きな家や川沿いの棚田の方をゆっくりと指さし、教えてくれた。今、この家で独り暮らしだ。息子さんは町内にいるものの、田んぼはしないのだという。1人で1ha以上耕作していくだけに、その荷を抱げなくなつたとき、寺元で荒廃が進んだのだ。

引き受けようにも、近所の人たちもう手一杯なのだという。オーナー制度で賑わつた棚田も今年は休耕田である。アブラゼミばかりが山里の静けさを打ち破り、夏を謡歌していた。

だが、ここのお米はおいしくて評判がいい。

一口食ふると、味に魅せられ個人で買ひに来る人も多い。米は足りず、作れば売れるのだが、作り手がいない。「由緒ある棚田を残そうとい

う思いが、若い人になかなか伝わらない」とい

う。中段へと上つた。ここは半分ほど荒廃が進んだという。

ものの、青い苗がそろつた棚田群は緑美しかった。さらにその上、上段には民家と棚田が織りなす山里空間が空に向かつて広がつていた。上段には現在放棄地はない。かつては放棄地が一番多くあり、オーナー制度をここではじめたという。その後、オーナー田も下段へと場を移したもの、上段では耕作が復活し、今に続いている。

棚田脇の車道から川を越え、民家の方へ向かつた。ここは川の水が冷たく、かつては川の中で豆もやしが作られていたという。家と屋根統きの馬屋を持つ農家があつた。数頭の黒毛の牛がいる。子牛の出荷用だ。今、ここは定年後にUターンした60代の夫婦が暮らす、ちょうど上方の棚田の中で草刈りを続ける姿が見えた。

黒田さんが言う。

「前は、ここのおじいさんが独り暮らしで、棚田も1人で作つてイベントも手伝つてくれていたね。それが突然亡くなられたんです。で、鹿児島市内に出ていた60代の息子さんが帰つてきてね。それまでちつとも帰つてきてなかつたんですよ。でも、帰つてくると『せないかん』って思うかも知れないですね。今、一番頼りにしています。牛も3頭だつたのを6頭にまで増やしていますし、奥さんも農業をした

ことがないのに、すごく牛をかわいがつてね」

明るい灯火を見たようだつた。誰かが一生懸



寺元には約100人が暮らす。多くは跡継ぎを都市部に出したとはいうが、中学生以下の子どもが10人以上と比較的多い。棚田オーナー制度の再開を待つ人もいる。棚田を含め金山の遺跡を歩く「さつま永野ウオーキング大会」は、今年2月に第10回目を迎えた。振る舞いで出される「がね」(かにの鹿児島丸)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。魅力も多い。町内でも、寺元の活動に刺激を受けた棚田地域も出てきた。

一見弱々しく見えた灯火だが、案外強いのかもしれない。それが地域の厚みなのだろう。魅了する「がね」(かにの鹿児島丸)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。今年2月に第10回目を迎えた。振る舞いで出される「がね」(かにの鹿児島丸)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。魅力も多い。町内でも、寺元の活動に刺激を受けた棚田地域も出てきた。

一見弱々しく見えた灯火だが、案外強いのかもしれない。それが地域の厚みなのだろう。魅了する「がね」(かにの鹿児島丸)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。今年2月に第10回目を迎えた。振る舞いで出される「がね」(かにの鹿児島丸)が人気だ。これは、かにに見立てたサツマイモのかき揚げである。魅力も多い。町内でも、寺元の活動に刺激を受けた棚田地域も出てきた。

## 鹿児島市八重地区——グリーン・ツーリズムに欠かせない存在に

「景観がここは良かでなあ」

八重地区棚田保全委員会代表の桑原盛男さん(74)が豪快に言う。鹿児島市の北東部、旧郡山町八重地区。平成の大合併で鹿児島市となつた。八重地区には、多いときで38戸あつたが、ここ2~3年で30戸になつた。そのうち3戸に中学生以下の子どもが4人いる。

「ここは入つてもこないが、出てもいかない」

出て行つても、帰つてくるという。外で家を借りて暮らすよりも土地があることに家を建て、すばらしい景観とともに暮らす選択を最近はするようになつてきた。

1:さつま町寺元の棚田。中段部分。反収は10俵。寺元の米は、ヒノヒカリ精35kg7000円で売れる

2:寺元棚田保存会代表、黒田敏隆さん。永野金山の観光ガイドも務める地元通

3:寺元の下段の棚田で出会つた久保田親美さん。わらこづみの名人でもある

4:地元永野の山菜採りの名人。旧駅舎利用の永野鉄道記念館で黒田さんへの取材中、わらびのお裾分けをいただいた

「ここは、水と空気と米が良いところ。そして景観が良か。まあ、棚田は守らないかんとみんな思っているから帰つてくるというのもあるんでしょう」

平成19年から棚田オーナー制度をスタート。8家族の受け入れからはじまつた。今年は24族と、大人気だ。毎年、脱穀をした日にもう翌年の予約が入る。



- 1: 桑原盛男さん。ここでは昭和初期まで開田が続いていたといふ。「物心がついたころ、戦後すぐ。田んぼ開きをしたのを覚えている」という。昭和22年が23年あたりの話  
2: 八重棚田館。市や国の補助を利用して平成19年にできた八重の交流施設。イベント時の交流会も雨が降っても安心になった  
3・4: 鹿児島市八重の棚田。標高は400~430m辺りに広がる。米はブランド化はしていないが、上之丸集落と笠之段集落が30年ほど前に統合し八重地区棚田保全委員会にはもともと笠之段集落の人は、ここに田んぼはなく、ほかの地区に。だが、八重地区棚田は、豪快な石積みが連なる。明治の初め頃にはできていたようだ。昭和30~40年代には1000枚以上あつた。現在、耕作している田んぼは240枚。12.4ha。この耕作者は30戸中17戸。50代が7~8人、30代もいる。「あと20年ぐらいはなんとかなる」という。

何しここはロケーションがいいのだ。市の公社が運営する八重山公園と隣接し、公園の延長線上にある。八重山公園は鹿児島市街地や桜島、錦江湾を一望でき、広く愛されている。展望台、キャンプ場、野外ステージ、また甲突川の源流池など観光資源も豊富だ。それと相まって、足を運びやすい。道路も広い。駐車場もある。12haに広がる石積みの棚田は、こうした観光資源と融合し、その価値を高めている。

かつては見に来る人などいなかつた。今はアマチュア写真家も来て、注文をつけたりするほどだ。人が訪れ、人の目もあると地元は草刈りにも余念がなくなった。年に5回は草刈りをする。

「田んぼは変わらんのに、10年くらい前から人の見る目が変わつた。『棚田、棚田』ゆうようになつて……」

鹿児島市の人口は約60万人。交流人口も獲得しやすい。今後は、地方都市に仕事を求めるJターンやIターン組の居住選択の射程にも入つてくるだろう。耕作を続けることで、美しい生活環境を保つだけでなく、観光資源としての価値が高まる。まさに市のグリーン・ツーリズムに欠かせない存在となつていて。

今はそば植えなども含め、年7回イベントを行なう。米作り体験は14年目を迎え、周囲からの継続への期待もあって「やめようにもやめられんようになってきた」とか。多くは鹿児島市内から訪れる。鹿児島市街地からは車で約40分と便も良く、家族連れもりピーターも多い。

この棚田は、豪快な石積みが連なる。明治の初め頃にはできていたようだ。昭和30~40年代には1000枚以上あつた。現在、耕作している田んぼは240枚。12.4ha。この耕作者は30戸中17戸。50代が7~8人、30代もいる。「あと20年ぐらいはなんとかなる」という。

何しここはロケーションがいいのだ。市の公社が運営する八重山公園と隣接し、公園の延長線上にある。八重山公園は鹿児島市街地や桜島、錦江湾を一望でき、広く愛されている。展望台、キャンプ場、野外ステージ、また甲突川の源流池など観光資源も豊富だ。それと相まって、足を運びやすい。道路も広い。駐車場もある。12haに広がる石積みの棚田は、こうした観光資源と融合し、その価値を高めている。

かつては見に来る人などいなかつた。今はアマチュア写真家も来て、注文をつけたりするほどだ。人が訪れ、人の目もあると地元は草刈りにも余念がなくなった。年に5回は草刈りをする。

「田んぼは変わらんのに、10年くらい前から人の見る目が変わつた。『棚田、棚田』ゆうようになつて……」

## 鹿児島県の 棚田・棚畠を守るために

鹿児島市八重地区的棚田オーナー制度には県

や市からの補助があり、赤字にならず継続が可能だと聞いた。県としても棚田保全に力を入れている。「ただ保全するだけではなく、農地は農地として使つてはじめて風景になる。交流は、自分たちで農地を守つていくための手段の一つ。だから、交流にも力を入れてもらいたい」とい

うのが県の考え方だ。

平成10年、県は棚田基金の積み立てをはじめ、

その運用金で棚田保全の支援を行つている(中

山間ふるさと・水と土保全推進事業)。その中の保全活動支援事業として、棚田保全と都市交流に取り組む地区からの申請をもとに認定し、最初の5

年間は30万円/年、その後は20万円/年の支援

をする。平成27年度は、新規3地区を含め、計

13地区がその対象となつた。

ただ、鹿児島県も棚田地域の数は多い。県が

把握しているだけで80か所以上ある。「鹿児島

の棚田とは何だろう。守つていくべき棚田は県

内のどこにあり、誰がどう守つていくのか」、そ

んな疑問に答えるべく、県の棚田の実態をつか

もうと台帳づくりが進む。平成13年頃に一度78

か所のデータを集めているが、山に還つたり、

また新たに把握した場所もある。

今までに「鹿児島県の棚田(棚畠)台帳」を作成し直している最中だつた。

さらに、県内の棚田を有する市町村がネット

ワークを組んでいるのも鹿児島県の大きな特徴だ。「棚田等保全協議会かごしま」である。鹿児

島県土地改良事業団体連合会が事務局となり、

さつま町や鹿児島市、湧水町など棚田を有する

12市町村(\*2)と各種団体が加入し、研修会開催

や全国棚田サミットへの参加も継続してきた。

ちなみに、県が平成13年に初めて、棚田の保全活動を認定し助成したのは、湧水町幸田の1

地区だつた。「幸田の棚田」は、日本の棚田百選でもあり、地区独自のブランド米を売り出し、田植えや稲刈りといった体験・交流も受け入れてきた。県内の棚田保全活動を牽引してきたところだ。県の初認定から14年。今、湧水町において、棚田保全と地域の元気はどうつながつてゐるのだろうか。湧水町(※3)へ向かつた。

湧水町幸田地区の副区長、宮里廣昭さん(67)が大きく息を吸うよう話を。役場から約数km、棚田と木々の緑が織りなす光景の中、深呼吸をする贅沢がここにある。だからであろうか、荒れた棚田は目立たず、草刈りも行き届いている。

現在、幸田地区には、約300世帯約700人

「ここはいいですよ。朝起きたときの緑の感触……気持ちの良かこと……」

湧水町幸田地区の副区長、宮里廣昭さん(67)が大きく息を吸うよう話を。役場から

約数km、棚田と木々の緑が織りなす光景の中、深呼吸をする贅沢がここにある。だからであ

るうか、荒れた棚田は目立たず、草刈りも行

\*2:「棚田等保全協議会かごしま」の会員市町村は、鹿児島市、日置市、指宿市、南九州市、薩摩川内市、長島町、さつま町、霧島市、湧水町、大崎町、南大隅町、屋久島町

が暮らす。高齢化率は43・75%。約1万人の町内には16の地区があり、幸田地区はその一つ。

幸田地区にある幸田小学校は児童数35名。町内に5つある小学校うちの1校である。幸田地区は、小学校を核とした地域づくりを重んじてきました。町でも学校統合の予定はない。

「この小学校は幸田にある町営住宅の子どもたちで持っているようなもんです」  
宮里さんが笑う。平成12年、幸田に3棟の町営住宅が最初に建った。地元の子育て世代がここに帰ってきた。地域の要望は続いた。平成25年に増え、現在、若い29世帯が町営住宅で暮らす。「ほかの地域からようらやましいと言われますね。これができていなかつたら、子どもがいなくなってしまいますよ。地元としては、まだ造りたいですね」

区長の吉水康夫さん(64)が言う。小学校の周辺に建てたことで、子育て世代はより安心し、幸田での暮らしを選びはじめた。  
「幸田は田んぼが主。だから、ここに住む人が暮らす環境の棚田を大事にしていかなければ、地域は良くなつていかない。誰かが最初に先頭切つてコツコツやっていけば、おいどんも加勢せねば、とみんなついてくるようになる」

今、「多面的機能支払交付金（水土里サークル活動）」で、田植え前の田んぼ一帯に観賞用の菜の花を植えようと宮里さんは考えている。  
「ここは30代の農家もいて、若い人が多いです。でも、だんだんお年寄りが多くなつて、田んぼを作れん人も出てきた。毎年田植え前、水路清掃や整備をするとき、みんなが寄つてきて自然と井戸端会議になる。そこで『今年は作れん。誰か作ってくれる人はおらんとかい』と話が出、『良かよ』と話がまとまるんですよ」

地区はあうんの呼吸で動いている。互いの信赖関係が壊れていないからこそ、声をかけあえ、協力し合う体制があるので。

## 幸田頭の棚田と明治12年の絵図

85歳といえば、昭和一桁世代である。

その親が携わつたならば、大正ごろの造

成であろうか。

「ここに古いもんがあるんよ」

宮里さんが話を聞いていたコミュニティセンターの壁の上

棚を指した。長細く巨大な木の箱が目に入つた。長さは3~4mはあるうか。箱

5年はありますか。箱を開けると、長い巻物が出てきた。大人が4人

がかりで広げた。巨大な絵図だった。

明治12年（1879年）作成の、幸田村の絵

図だ。現在の小学校辺りの水田や家々や道も、今とそう変わらないという。田畠が川沿いに拓かれた豊かな山里が絵図から見えてくる。幸田頭の地名を探した。

絵図の中の幸田頭は山だった。同じ幸田村で、

国見岳の北側の鉄山にも石積みの棚田群がある

が、そこも山だった。明治12年には、武者返しの石垣はなかつたのだ。山の奥に、巨大な石垣

を組む財力と労力とその必要性は、明治以降になつて出てきたようだ。幸田川を遡れば、江戸

時代にはすでにあつた緩やかな棚田からはじまり、さらに奥へ奥へと開墾し、石をより高く積

んだ棚田を見ていくことができる。

今、このルートを通り、幸田地区全体の棚田を楽しむことができるウォーキング大会が人気だ。今年9月には、第10回目の「ウォークin幸田」が開催される。

棚田のある美しい地域だからこそ、田んぼの保全が地元の誇りを守つている。そして誇りが、子どもや子育て世代の呼び込みへとつながつていこうとしてコミュニティは続き、農山村も続く。



明治12年の幸田の絵図。複写もされておらず、現物。地域の人もなかなか目にできない

向かって左が、幸田区長の吉水康夫さん。右が宮里廣昭さん。幸田コミュニティセンターにて



標高300~400mという幸田の米は昔から評判が良い。町のブランド米は「湧水米」。幸田の農家4戸で結成する生産組合の米は「棚田米」。幸田の棚田米は「幸田米」

幸田頭の棚田。武者返しが見事な幸田頭では、3人の人が耕作。この下辺りに植林はされているものの、独特な石積みの棚田があるという

幸田地区の中でも最上部、標高400mほどの幸田頭の石垣が見事と、そこを中心的に10haが「日本棚田百選」に認定されている。武者返しといつた反り返つた石積みがある。とはいっても幸田地区は全体に棚田ばかりだ。標高約650mの国見岳から北へと流れる幸田川沿いに細く長く、田んぼが拓かれている。緩やかな傾斜の棚田の重なりが川沿いに続き、集落をやわらかに彩る。

「ここは幸田頭だけではなく、もともと幸田はぜんぶが石垣ですね。耕耘機がいかないくらい全部石垣でした。田植えも2人入ればいいくらい狭い。本当に狭い。みんな何枚も持つていて、牛で起こしている時代は良かったけどな」と宮里さん。平成2年に37haの整備が完了した。吉水さんが続けた。

「ほ場整備でうちも4枚になりましたけど、昔は5反ぐらいで20枚以上ありました。整備のとき、石がかなり出てきましてね。石を捨てるのが大変でした」

その後は保存を意識し、「棚田地域等緊急保全対策事業」（平成9・12年）を入れ、できるだけ棚田の姿を残すよう整備を進めてきた。平成25年には棚田の奥に駐車場を設け、そこへ向かう狭い道も拡幅の予定だ。

「幸田頭の棚田は、鉱山の人たちを呼んで造つたゆうて、聞いてるんですよ」宮里さんが記憶を探るように話す。

「今、85、6歳のおばちゃんが話すには、その人のお父さんがあの棚田の石垣を造りやつた人やから、新しいゆうて。その人は山ヶ野金山の技師で。その人ならある程度覚えちよつたろう。幸田頭は、鉱山関係の人たちが何人か来て加勢して、田んぼの横を流れる川から石を集め、石を楽しむことができるウォーキング大会が人気だ。今年9月には、第10回目の「ウォークin幸田」が開催される。

棚田のある美しい地域だからこそ、田んぼの保全が地元の誇りを守つている。そして誇りが、子どもや子育て世代の呼び込みへとつながつていこうとしてコミュニティは続き、農山村も続く。

\* 3 : 湧水町は人口1万人で、年間観光客は73万人。宮崎県に隣接し、熊本県も近く多方面から訪れる。湧水町では定住人口よりも交流人口を増やそうと修学旅行の受け入れや各種イベント開催が盛んだ。野外彫刻の県立霧島アートの森もあり、町民参加の大型造形作品づくりも好評である

農山村は続く

## 棚田サミットをきっかけに

### 上勝町棚田感動ビジネス

(有)環境とまちづくり（徳島大学上勝学舎） 澤田俊明

2011年

全国棚田サミット開催後、  
棚田の活動をつなぐ

2011年10月に徳島県上勝町で第17回全国棚田サミットが開催された。

「サミットやつて地元になんかいいことあるんか？」

第17回上勝棚田サミット第2分科会での自問自答ともいえるパネラー中内英夫（地元八重地地区のリーダー）の発言である。

サミット終了後、4つの棚田地区のコアメンバーの集まりを持った。中内英夫（八重地）、柳瀬武志（市宇）、武市功（田野々）、松下和照（樺原）の4名とアドバイザー澤田俊明。一連の棚田サミット開催で構築された4つの棚田地区の連携をこのまま終わらせるのは「もったいない」という認識で一致し、各棚田の文字を1文字とつて自発的組織「やいたか」が、2012年5月に誕生した。

サミット前は、集落ごとにバラバラだった棚田保全活動の活動が、サミット終了後、集落間で連携できる人的環境の礎が整つた。いいことはあった。

2013年から、

この指止まれ方式で

上勝学舎の連携スタート

上勝町の集落活動の多くは、丁寧な集落内での情報共有と集落合意により、各集落単位ごとで展開される。また、集落意思決定は比較的時間をかける傾向があり、良質な活動企画がその着手までに時間を使ったり、あるいは、企画倒れになる場合もある。

徳島県で高齢化率が51%超と最も高い上勝町では、活動可能人口が急速に減少している。超高齢化の進展は、集落活動の企画・着手速度の早期化とともに、活動がビジョンづくり段階で終わるのでなく、活動の実行段階までの実現を強く要請する。

2014年（前半）から、  
活動のネットワーク化による  
棚田感動ビジネスを企画展開

る「かみかつ棚田交流月間」、「4地区的祭り記録」、「棚からぼた餅開発」等を行った。「この指止まれ方式」は、自分たちだけで実践するのではなく、その活動を共有し、活動参加者の環を広げることを意味する。この間、「やいたか」は、徳島大学上勝学舎と活動連携の提携を行い、棚田石積み学校、棚田オープンファーム、棚田ウェディングなどの集落課題解決型の活動情報を蓄積した。

スタート直後の「この指止まれ方式」は、小さな連携にとどまっていた。2014年5月に、上勝町におけること10年～15年の諸活動の蓄積、サミット終了後の「やいたか」の活動の蓄積を融合し、式でスピード感を重視した活動ビジョンづくりを行つた。

2014年には、4地区の棚田をつなぐ「かみかつ棚田未来生活圈交流プロジェクト」を開催し、上勝町で初めてとな



勝町」から構成される「かみかつ棚田のめぐみ活用会議」が設立された。アドバイザーとして、地域シンクタンク「環境とまちづくり」から澤田俊明、坂本真理子が参画した。実現できた最も大きな要因は、ここ10年～15年にわたる信頼関係、つまり社会関係資本に起因する。

2014年(後半)から、

## これから

### かみかつ棚田のめぐみ 感動、ビジネス・プロジェクト

棚田ライトアップ・準備、八重地の棚田

上勝町での棚田・里山保全活動の現状・課題として、①上勝町では、活発な棚田・里山の保全活動・交流活動が実践されている、②しかし、棚田オーナー制をはじめ交流活動の域を出ておらず、棚田・里山の高いビジネス資源価値が、未開発・未活用の段階にある、③活動主体ごとの個別活動になつており、消費者の混亂が発生している、ことがある。

「かみかつ棚田のめぐみ感動ビジネス・プロジェクト」は、こうした課題と未来づくりのため、①棚田・里山の恵みを生かす、②感動とビジネスを創る、③永続的に棚田・里山を守ることを目標に、棚田・里山における環境保全型ビジネスの展開をめざすプロジェクトである。

2014年の棚田・里山ビジネス活動として、約6ヶ月間で「棚田ウェディング(1組)」「棚田オープニングファーム(1回)」「棚田ノルディック(2回)」「棚田オーナーリニューアル(1式)」の試行を行い、販売310万円、交流人口800名、協働人口(ボランティア)200名の結果を得た。そして、活動連携団体として、町内団体のほか、町外から、学校法人穴吹学園、徳島空港ビル、JAL、JR四国など25組織の連携を実現した。

棚田ノルディック、  
市宇・櫻原・田野々

得たもので大きなものは、棚田感動ビジネス・プロジェクトをきっかけとして、上勝町の棚田・里山保全、いろいろなゼロ・エイスト、森づくり、地場産業等の情報共有プラットフォームである「かみかつ観光交流協議会」が設立されたことがある。活動やボランティア募集等に関する関する情報共有を主とする組織で、もうひとつ「この指止まれ」が拡大した。

また、2014年の本プロジェクト試行での棚田のめぐみ感動ワークショップや、徳島空港・上勝学舎MICe講座をきつけてとして、2015年10月からJALパック社による羽田発→上勝の旅行2商品の販売も確定した。

力を持合わせるということ(役割と協働)  
地元にしかできないこと、地域にしかできないこと、民間・企業にしかできないこと、行政にしかできないこと、研究機関にしかできないこと  
協働により新たな価値・展開が生まれる

※第17回全国棚田(千枚田)サミット、分科会総括報告・抜粋(報告者津田俊明)  
第3分科会(棚田の活用)登壇者・高山承之の意見をベースに検討・補完  
上勝町櫻原の棚田

2011年に開催された第17回上勝棚田サミットは、間違いなく、今の上勝の原動力となっている。上勝棚田サミットで全国から学んだ「それぞれの活動主体にしかできないことの実践」を大切にして活動を継続したい。



上勝町櫻原の棚田

# 氷ノ山と生きる棚田

## 鳥取県若桜町

おそらく日本一の標高の高さを誇るであろう巻米棚田。鳥取県と

「昨晩は寒くてコタツをつけました」

巻米の棚田農家であり、スキ

客の民宿を営む奈羅尾寿夫さん(64)

が腕をさすりながら言う。

「お盆を過ぎたらストーブがいる

んですよ」

集落の家々は、棚田より低く標

高600m辺りで寄り添うように

建ち並ぶ。そして800mを超える場所には巻米棚田を見下ろすよ

うに町営の宿泊施設が建ち、スキ

ー場に入口や民宿が人々を迎える。

そのまま上には、県の氷ノ山ビ

ジターセンター「氷ノ山自然ふれ

あい館」も建つ。ここから山頂へは登りで2時間程度。学

校単位での利用も多く、夏は登山

や自然観察、冬はスキーと賑わう。

棚田はそんな中には在る。

奈良時代には氷ノ山へ登る信仰

も厚く、また修験者の行場として

多くの山伏が集まつた歴史も持つ。

14世紀に、山頂にあった巻米神社

は集落に下遷し、集落の氏神とな

った。今なお、安産の神さまとして名が知られ、兵庫県側からの参

拜者もいるほどだ。

江戸時代には、因幡と但馬を結

ぶ往還「お伊勢道」が通り、氷ノ

山越えで伊勢参りへ向かう人々で

賑わった。今も、道標や石碑がそ

の名残を見せてくれる。

一方、巻米棚田の開拓は近世の

頃からと言われ、近代に至るまで

開拓が続いた。町史によると、寛政6年(1794年)に巻米には

20戸。約100年後の明治15年

日本の棚田百選に認定されている巻米棚田。冬は、雪深く3mは積もる



奈羅尾寿夫さん。棚田百選内の奈羅尾さんの棚田の前で。多いときで1町歩を耕作していたが、現在は8反

も棚田が拓かれているから、ここにその上、約820mのところに雪深い冬を抜け切り、初夏を謳歌は雪深い冬を抜け切り、初夏を謳歌はいつて良さそうである。

田植えが済んだばかりの巻米は、やはり「日本一高い棚田」と雪深い冬を抜け切り、初夏を謳歌はする生命の気配に満ちていた。

棚田には創意工夫が満ちている。ここは雪解け水で冷たく、あぜ波シートが欠かせない

ha。転作等もあり、今、若桜町で米が作られているのは160.91ha。転作等もあり、今、若桜町で70haという。品種はコシヒカリやヒトメボレだ。これらを「若桜米」としてブランド化し、せめてほ場整備したところは守っていこうというのが町の姿勢だ。

一方、巻米は整備を入れていな。品種は早生のハナエチゼン。奈羅尾さんは「こころまち」も作る。巻米の米は、農協を通さない独自の販売ルートが確立し、スリバー・マーケットや米屋に卸されている。個人で合鴨農法に取り組み、直販で合鴨米を東京に出す農家もある。巻米は個々がベストを尽くすスタイルでやってきた。

「今、玄米30kg6500円です。これだからまだやつていいける」と奈羅尾さん。獣害対策の電柵などコストも重い。

「うちでは、棚田がいろんなところにありますから、車での移動距離も長い。ガソリン代もかかるんで歩いては回れないですから」

冷害で反収が下がれば、農家は致命的だ。町史にも江戸時代・天保7年(1836年)に長雨冷害で

は獸害問題からも喫緊の課題だ。

「田んぼが荒れると、イノシシやシカが平気で下りてきて、獣害がひどくなる。そして、暮らしづらくなる。その結果、人がいなくなってしまう」と奈羅尾さん。獣害による飢饉の様子が記されている。

「田んぼが荒れると、イノシシやシカも里に下り役場周辺でも見かけるようになつた。田んぼの維持は獸害問題からも喫緊の課題だ。

過去、リンゴも栽培されたが、クマの被害が大きくなつた。山を歩くと出会うばかりか、最近はクマもシカも里に下り役場周辺でも見かけるようになつた。田んぼの維持は獸害問題からも喫緊の課題だ。

「田んぼが荒れると、イノシシやシカが平気で下りてきて、獣害がひどくなる。そして、暮らしづらくなる。その結果、人がいなくなってしまう」と奈羅尾さん。獣害による飢饉の様子が記されている。

最も標高が高い棚田。標高は820m程度。道路によって寸断されたというが、いまも道路を挟みつつ耕作が続く。「焼尾(やけお)」という小字がついた場所は、百選に認定された棚田の上に連なるように位置する

「田んぼが荒れると、イノシシやシカが平気で下りてきて、獣害がひどくなる。そして、暮らしづらくなる。その結果、人がいなくなってしまう」と奈羅尾さん。獣害による飢饉の様子が記されている。

「田んぼが荒れると、イノシシやシカが平気で下りてきて、獣害がひどくなる。そして、暮らしづらくなる。その結果、人がいなくなってしまう」と奈羅尾さん。獣害による飢饉の様子が記されている。

※1 昭和59年発行の町史内に、巻米村ではないが、若桜町内の吉川村に残っていた文書『天保七丙申凶作之事・吉川村』等から冷害による飢饉の様子が記されている。

大凶作となり、人々が餓死した記録が書かれている（※1）。そんな時代の荒波を抜け、現代へとつなげられた棚田である。

「反収は今まで最高で10俵（600kg）ですね。水温の管理と施肥がポイントです。放つておいたら6俵、反収5俵を切つたことも。」

まさに隠し田。小字は「焼所」という場所。地元の通称「段」（この辺りでは、広い平原を「段」と呼ぶ。「なるい（=ゆるやかの意）」平らな場所を「段」というようだ）。集落から離れ、放棄も増えつつあるが、11～12戸の農家で耕作しており、誰かが引き受けるなど、互いにできることはやってきた。3畝ほどから大きいものだと1反3畝程度。ここは石が出ず、石積みではない。土が粘土質ゆえ、「なめの水路」（=素掘りの水路の意）のまま現在も使われている

この一角が代表的な巻米棚田として知られている。

石垣は高いものでは3m弱。あまりの高さゆえ、真ん中に犬走りといった段が設けられている。広

い田だと、長さは70～80mあり、1反3～4畝あるという。

初夏の雨上がり、田植えがすんばかりの畦のイタドリや田んぼ脇の高木にもたくさんの白い泡の固まりがぶらさがっていた。

「モリアオガエルが一斉に産卵したんですよ」

奈羅尾さんが、飼育しているかのように愛情を込めて話す。ここにもあそこにも、上にも。しかも、アカハライモリがまるでオタマジヤクシのよう、わらわら泳いでいる。ここは生き物の宝庫なのだ。

そして今、耕作放棄という荒波がじわじわと押し寄せていく。この15年、農家は闘ってきた。棚田百選認定の翌年、平成12年には、奈羅尾さん個人がオーナー制度を引き受け、「巻米ブチファーマーズ制度」をスタート。個人対応ゆえ宣伝はしない。最も多いときで数組あつたが、現在は、栃木県からのオーナーがたつた1人、7～8年通っている。

かつては、鳥取県内の農村で活動を行うNPO「学生人材バンク」も来てくれていた。が、補助が継続する仕組みがなく、終了している。若者たちが草刈り、電柵張り、水路清掃などで賑わつたという。

若桜町全体では、Iターンも増えてきたが（※2）、巻米集落には、IターンもUターンもない。子どもは、小中学生はいないものの、高校生のほか、3歳児と1歳児が

いる。希望はある。

棚田の中を移動すると、宿泊施設のすぐ下に、作秋の稻株が残つたり、山腹の魅力ある棚田や食や文化も観光資源や学びの財産として

なんと三日月型をした棚田があつた。田植えされた苗までかわいらしく。「はちまき」の棚田に「三日月」の棚田。人を引きつける魅

力がたっぷりあった。

巻米は水ノ山ともに生きてきた。だからこそ、大自然水ノ山とともに、山腹の魅力ある棚田や食や文化も観光資源や学びの財産として

いまだでは作つていていたんですが、わざ水だけですから、ぐるっと田に水を入れるのもたいへんな場所で、やめてしまつて」

それはちまき棚田のすぐ下には、なんと三日月型をした棚田があつた。田植えされた苗までかわいらしく。「はちまき」の棚田に「三

日月」の棚田。「人を引きつける魅力だけに、乾いた土が目につく。田だけに、田植えがすんばかりの畦のイタドリや田んぼ脇の高木にもたくさんの白い泡の固まりがぶらさがっていた。

「ここは、ずっとがんばって作つてこられたんですが、この春亡くなられて。作るつもりでいた田んぼですよ。でも、作る人がいなくなつてこういう状態です。すぐに作り手を見つからないですから

水ノ山とともに、新しい時代へ宿泊施設「水太くん」が建つ場所もかつては棚田だった。ここは登山をはじめ、子どもたちが山を

学ぶ拠点となつて。訪れた日も、鳥取県内の小学生が入れ替わり水太くんを後にし、「元気いっぱい山頂を目指していた。

この6月には、巻米棚田で氷ノ山ビジターセンターのネイチャーガイドによる親子向けの教室「棚田の生き物観察＆調査」が開催さ

れている。棚田は格好の環境教育の場だ。次は、棚田をフィールドに耕作や地域文化などへの展開を期待したい。巻米は、県内でも最

後まで伝統行事「虫送り」が残つてたり、独特な祭事が続く貴重な集落だ。子どもをはじめ、外

の人たちが多く訪れる巻米だからこそ、独自の道がありそうである。小さな丘が棚田の中にあり、その丘の上には栗の小さな森がある。

下：本文中で紹介した「はちまき」棚田と「三日月」棚田。まだ、ここが発するメッセージが濃厚なうちに、子どもたちをここに呼び寄せてほしいと願う  
左：町の第3セクターが運営する研修可能な宿泊施設「水太くん」。この辺りでは、早くから山岳スキー場として人気があり、大正期にはすでにスキーキャンプもできていた  
左下：（財）鳥取県観光事業団が運営する氷ノ山ビジターセンター「氷ノ山自然ふれあい館 韶の森」



※2：町全体でも昭和35年に約9600人いた人口も平成27年には3700人に。町の高齢化率は42%を超える。町の子育て関係の支援は手厚い。保育料は完全無料。全国でもっとも早く手がけた。安価な若者向け住宅や、医療費も高校卒業までほぼ無料となるように補助がつく。さらには、給食費の半分町負担や、高校などの通学費の補助もあり、子連れで定住する人も最近は出てきた。



巻米神社は安産の神さま。腹帯が鐘に吊されていた。安産を願い、すでに奉納されている腹帯の一部を切り取り、お守りにする。そして、お礼参りでは新しい腹帯を持っていく。真っ白な腹帯が周囲の緑に映えていた。今なお信仰が続いていることを、その白さが物語っていた



スキー場のゲレンデでは夏イチゴが栽培されていた。春、ゲレンデを畑に変える。かつては夏大根を作っていたが、数年前からはイチゴに。収穫は6月半ばから10月はじめ。鳥取市内の洋菓子店ほか、米子の市場でもひっぱりだこ。少し酸味が強く、ジャムやアイス、シャーベットにすると絶妙な味の深みを出す。夏イチゴは2軒が栽培



まさに隠し田。小字は「焼所」という場所。地元の通称「段」（この辺りでは、広い平原を「段」と呼ぶ。「なるい（=ゆるやかの意）」平らな場所を「段」というようだ）。集落から離れ、放棄も増えつつあるが、11～12戸の農家で耕作しており、誰かが引き受けるなど、互いにできることはやってきた。3畝ほどから大きいものだと1反3畝程度。ここは石が出ず、石積みではない。土が粘土質ゆえ、「なめの水路」（=素掘りの水路の意）のまま現在も使われている

日本では、棚田が山の中の見えない場所にも拓かれていた。  
「まさに、隠し田という場所があるんですね。案内します」

巻米では、棚田が山の中の見えない場所にも拓かれていた。  
「まさに、隠し田という場所があるんですね。案内します」

車でぐるりと迂回するため、2～3kmはありそうだつた。ここも標高は700m～750mと高い。  
2町、20枚ほどの棚田である。おそらく明治時代に造成された棚田だ。そこで、この地区で一番新しい棚田だ  
目に入る、最も美しくまとまつた

次に、日本の棚田百選認定の約5ha約100枚の棚田群へ向かつた。メイン通りに面し、人々の

若桜町全体では、Iターンも増えてきたが（※2）、巻米集落には、IターンもUターンもない。子どもは、小中学生はいないものの、高校生のほか、3歳児と1歳児が

通称「はちまき」と呼ばれてきた

棚田に出会えた。こんもりとした

小さな丘が棚田の中にあり、その

丘の上には栗の小さな森がある。

# 全国棚田(千枚田)連絡協議会会長が交代します

平成27年度全国棚田(千枚田)

連絡協議会の会長に就任いたしました。山形県上山市長の

横戸長兵衛と申します。

本協議会での活動を通して、棚田の多面的機能と役割の見直しや、農村地域の活性化への機運をなお一層高めるため、皆様方とこれまで以上に連携を密にしながら本会運営に当たっていきたいと考えております。

さて、昨年は「未来へつなごう実りの大地」をテーマとし、記念すべき第20回となる全国

棚田(千枚田)サミットが当市を会場として開催され、全国各地より大勢の方にお越しいただきました。盛会のうちに終了することができ、改めて多くの関係者の皆様方に感謝を申し上げますとともに、東日本大震災により被災した被

災地の皆様へ元気が発信され、復興へ向けた後押しに繋がったものと感じております。

また、本年10月23日・24日の2日間にわたり、「浜野浦の棚田」に代表される、玄界灘に面し、青い海と緑豊かな田園風景の広がる佐賀県玄海町において、第21回全国棚田(千枚田)サミットが開催されます。情報交換や現地見学などを通して、皆様方から活発な議論を図つていただきながら、棚田の保全活動のなお一層の推進に繋がりますことを願っております。

結びに、当協議会の更なる発展のため、1年間、皆様方のご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げ、就任の挨拶といたします。

平成26年度、全国棚田(千枚田)

連絡協議会の会長を仰せつか

り、微力ながらその任を務めさせていただきました。1年間会員の皆様にはご支援・ご協力を賜り、本紙面をお借りして

厚く御礼申し上げます。

当協議会も設立20年目の節目を迎え、昨年は東北地方では初となる全国棚田(千枚田)サミットを山形県上山市で開催することができました。開催に際し、山形県や上山市の皆様には大変なご苦労があつたことと存じます。横戸市長をはじめ実行委員会、関係者の皆様にあらためて心より御礼申し上げます。

また、昨年は、東京ピックサイトで開催された「エコプロダクツ」に当協議会としては初めて全国の棚田保全団体(12団体)と共に出展し、都市部からの情報発信として、棚田保全のPR活動をすることができました。

そして、今年は10月23・24日、九州佐賀県玄海町に会場を移し、「全国棚田サミット」が、そして12月10からの3日間、東京ピックサイトで「エコプロダクツ」が開催される予定です。また、この2大イベントに先立ち、和歌山県では、10月15・16日の日程で、「第2回わかやまの棚田・段々畑サミット」が那智勝浦町で開催されます。

年々、棚田地域では、少子高齢化や担い手不足の影響で、かつてない危機的な状況となつてきていますが、日本の原風景である棚田「実りの大地」を未来へつなげていくため、当協議会会員が連携し、これらのイベントでの情報交換や交流を通じ、より一層、棚田保全・地域の活性化が図れるよう、ご祈念いたしまして、退任の挨拶とさせていた

会長に就任します

山形県上山市 市長  
横戸長兵衛

平成27年度全国棚田(千枚田)連絡協議会の事務局を務めることになりました。なりました山形県上山市です。協議会の円滑な運営を、会員各位のご協力をいただきながら進めていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

昨年10月23日～24日に当市で開催されました「全国棚田(千枚田)サミット」は第20回という節目の

開催年であり、また、東北地方の市町村で初の開催となりました。その

折は、全国各地から680名という多くの皆様方より

「かみのやま温泉郷」に参集いただき感謝申し上げます。併せて、開催にあたり、関係機関及び関係団体の皆様方からは、格別なるご支援、ご協力をいただき盛会裏に終えたことに對し、本紙面をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

さて、事務局を担当することになりました。私ごとにあります。私が4月の人事異動で農林課に配属され、昨年の棚田サミットには実質関与をしていなかつたのですから、おける取り組み状況、また各地域がかかるている課題等について勉強している最中です。

昨年現地見学会の場所であります。した小倉地区の棚田では、田植えも終わり、6月下旬には今年に入

り2回目の草刈りが行われてあります。法面が広いため3・4段に分けた草刈りを行つ場所もありま

す。本市の水田農家は、米価の低迷等も要因としてほとんどが兼業農家であり、勤労世代は会社等に勤めに行くことから畦畔の草刈り等は主に70～80代の人が汗を流しながら苦労しているのが現状です。

日本の棚田百選になるような棚田はありませんが、地域における水田が多く、中山間地域等直接支払制度や多面的機能支払制度等の集落協定のもと、素掘り側溝の泥上げや畦畔の草刈り等を共同で取り組みつつ農地の維持保全に努めている状況です。

そして、棚田保全の今後の大きな課題とされている高齢化や後継者不足等と同じような悩みを抱えてあります。

今年の棚田サミットは、「共につなげよう美しく豊かな棚田へふるさと未来につなぐ」をメインテーマに、10月23日～24日に佐賀県玄海町で開催される予定です。準備にあたる玄海町の担当課のみなさんは大変ご苦労をおかけいたしましたが、多くの皆様方から参集をいただき、ぜひ浜野浦の棚田でお会いすることを楽しみにしてあります。

(山形県上山市農林課 主幹 堀井 豊)

## 事務局、山形県上山市からのお知らせ



1:棚田の畦畔の風景

2:今、最盛期のさくらんぼのもり取り風景

2:今、最盛期のさくらんぼのもり取り風景

# 「つづら棚田災害復旧支援 3年間ありがとうございました」

被災直後から現在に至るまで、市内外の多数のボランティア、国、県、他自治体の皆様から沢山のご協力をいただきました。また多くの方々から心温まる義援金や支援物資を提供していただきました。

この様々なご支援をいただき、私たちほどなんに勇気づけられたことでしょうか。うきは市民・被災者を代表して心よりお礼申し上げます。

福岡県うきは市長 高木典雄

平成24年7月11日から14日にかけて九州北部を記録的な豪雨（のちに「九州北部豪雨災害」と命名され国の激甚災害の指定を受けました）により、福岡県うきは市は甚大な被害を受けました。

この災害により本市におきましても、1名の尊い命が奪われ、多数の方が負傷したほか、日本の棚田百選に認定されている「うきは市棚田オーナーの田植え。親子の笑顔が今年も見られた



づら棚田をはじめ、道路、橋梁、住宅、工場、農業用施設の損壊や農地の流出など50億円を超える甚大な被害を受けました。

災害後、ボランティアの方々による復旧作業支援、多方面からの支援金・義援金、県や他市町村からの技術職員の人的支援等、多くの方々からご支援をいただきながら早期の災害からの復旧・復興に努めてきました。

国から補助を受けていたる災害復旧工事が完了する平成27年3月末、今までうきは市の災害復旧・復興活動でお世話になつた方々へ感謝の気持ちを表したい、復旧・復興の現状を見てもらいたい、ということで「災害復旧支援感謝祭」を開催し、多くの方々にご参加いただきました。

最後になりましたが、この3年間、棚田学会をはじめ市内外のボランティアの方々から多くの義援金や支援物資をいただきましたことに感謝申し上げます。

つづら棚田再生実行委員会事務局長  
関 健児  
石井健太郎  
中島峰広（早稲田大学名誉教授）

中越準一さんと奥村慎太郎さんを悼む  
今年になつて、全国棚田（千枚田）連絡協議会の初代会長中越準一さんと十代会長の奥村慎太郎さんがお亡くなりになられた。柄原町長であった中越さんは棚田に対する関心を高める切っ掛けになつた第一回全国棚田サミット開催の仕掛け人であり、連絡協議会の基盤を築いた恩人である。また雲仙市長であった奥村さんは二つの開催地候補が競合した折、長崎市長の田上さんと協力して第十四回サミットの共同開催を調整実現させた功労者である。お二人のご功績を称えるとともに謹んでご冥福をお祈りいたします。



故・中越準一氏



故・奥村慎太郎氏

## 書籍紹介

### 『棚田学入門』



棚田学会編  
A5判228p  
2014年12月  
勁草書房刊  
本体2300円+税

## 編集後記

今号の特集は、「農山村は続く」と題し、過疎も高齢も確かに進みはしながらも、緩やかに、しなやかに、そしてたくましく続いている農山村の姿や各地の挑戦を紹介いたしました。都市的な感覚でいえば、人が減れば、そこは「消滅していく」かもしれないけれど、農山村はそういう数字では測れないことも多くあって、おっとどっこい「消滅はない」んだよねえ、そんな感覚をわたしは持っています。地域への愛情や思いが、人を動かし、人を呼ぶという、人間の基本的な営みが農山村からなくなったら、たしかに危機かもしれませんが……。どうでしょうか。みなさまはどんな風に感じいらっしゃいますでしょうか。どうぞライステラスへお声をお寄せください。石井里津子

## 会員募集中

新しく会員になったみなさま

<自治体正会員>和歌山県那智勝浦町  
<個人正会員>志藤 勝幸(山形県)

### 棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織 全国棚田（千枚田）連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

上山市役所農林課

〒999-3192 山形県上山市河崎1-1-10

TEL:023-672-1111(代)

FAX:023-672-1112

協議会 HP:<http://www.yukidaruuma.or.jp/tanada/>

# 第21回全国棚田(千枚田)サミットニュース

## テーマ:共につたえよう美しく豊かな棚田 平成27年 10月23日(金)~24日(土)開催 ~ふるさとを未来へつなぐ~

佐賀県  
玄海町

### オレンジ色の夕日が棚田に沈む絶景の「浜野浦の棚田」

玄海町は、佐賀県の北西部、玄界灘に面し、青い海と緑豊かな田園風景が美しい風光明媚な町です。人口6,100人ほどの小さな町ですが、昨年度は「ふるさと応援寄付金」制度で全国2位(納税額)になるなど、自慢の海産物・農畜産物がそろいます。初日の全体交流会や昼食のお弁当では、そんな玄海町、佐賀県の食をぜひご賞味ください。

玄海町を代表する「浜野浦の棚田」は、4~5月の田植えの時期、オレンジ色の夕日が山間に沈み、海と水田と畦道が描く造形美は息をのむほどの「絶景」。今年の秋は、蕎麦の花が咲くよう準備を進めているところです。

現地見学コースには、「浜野浦の棚田」の他、お隣、唐津市肥前町にある日本の棚田百選「大浦の棚田」や玄海町石工の祖所縁の豊臣秀吉が築城した「肥前名護屋城跡」(唐津市鎮西町)、甘草などを栽培・研究する「玄海町薬用植物栽培研究所」を見学できるコースなど計4コースを計画しています。

みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

#### 問い合わせ先

第21回全国棚田(千枚田)サミット玄海町実行委員会事務局

〒847-1421 佐賀県東松浦郡玄海町大字諸浦348番地

佐賀県玄海町役場 産業振興課

TEL:0955-52-2199 FAX:0955-52-3041

#### 開催プログラム

時 間	内 容	会 場
10月23日(金)	9:30~10:30 全国棚田(千枚田)連絡協議会総会	市民会館イベントホール
	10:45~12:00 オープニング・開会式	
	13:00~13:40 事例発表 ①玄海町役場 産業振興課——棚田米を起爆剤とした地域振興策 ②唐津青翔高校 環境部——玄海町の山・川・海	市民会館文化ホール
	13:40~13:50 開催地歓迎の挨拶:佐賀県知事	
	13:50~15:00 基調講演 演題「景観から見た日本の心」 講師:造園家、ランドスケープアーキテクト 涌井 雅之	
	15:30~17:30 分科会 第1分科会 棚田を未来へつなぐ~棚田保全の必要性~	市民会館文化ホール
	第2分科会 農業を未来へつなぐ~棚田を活かした農業経営~	市民会館イベントホール
	第3分科会 農村を未来へつなぐ~地域資源を活かしたムラづくり~	みらい学園体育館
	保存会意見交換会 棚田保全活動団体の運営と課題	市民会館中会議室
	首長会議 棚田における新しい動き	あすぴあ会議室
10月24日(土)	18:00~20:00 全体交流会	玄海町社会体育館
	9:00~12:00 棚田現地見学 Aコース:浜野浦棚田ウォーキングコース Bコース:浜野浦棚田と町内施設見学コース Cコース:日本の棚田百選コース Dコース:浜野浦棚田と名護屋城博物館・城跡見学コース	
	13:00~13:30 分科会のまとめ	市民会館文化ホール
	13:30~14:00 閉会式	



#### 第1分科会

棚田を未来へつなぐ  
~棚田保全の必要性~

コーディネーター:佐賀大学教授 五十嵐勉

#### 第2分科会

農業を未来へつなぐ  
~棚田を活かした農業経営~

コーディネーター:佐賀大学大学院特任教授 内海修一

#### 第3分科会

農村を未来へつなぐ  
~地域資源を活かしたムラづくり~

コーディネーター:[Nippon no Murai]編集長、一般社団法人 九州のムラ 代表理事 養父信夫

#### 保存会意見交換会

棚田保全活動団体の運営と課題

コーディネーター:早稲田大学名誉教授、NPO法人棚田ネットワーク代表 中島峰広

#### 首長会議

棚田における新しい動き

コーディネーター:東京農工大学大学院教授、棚田学会会長 千賀裕太郎